

岩手医科大学歯学会第 82 回例会抄録

日時：平成 29 年 3 月 2 日（木）午後 5 時 30 分より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C 棟 6 階）

特別講演

歯科材料の変遷と歯科理工学教育

Transition of dental materials and dental materials science education

○服部 雅之

岩手医科大学医療工学講座

歯科理工学は、口腔機能回復における歯科材料・器械・器具の理論と応用に関する学問であり、その範囲は金属、高分子、セラミックス、複合材料と極めて多岐にわたる。旧来から歯科理工学教育は、歯科精密鑄造法を柱としたカリキュラムで構成されてきた。最近では、歯科臨床における接着技術やデジタル加工技術の著しい進歩により、「脱鑄造化」によるメタルフリー化が進んでいると言っても過言ではなく、それら技術の発展に伴い、歯科材料のニーズも劇的な変貌を遂げつつある。さらに、疾病構造の変化、患者の審美的要求の高まりや貴金属価格の高騰など社会的要因も加わり、金属材料からセラミックス、高分子材料を用いた修復が主流となりつつある。

現在、本学において歯科理工学教育は第 2 学年後期、第 3 学年前期で講義と実習をそれぞれ教授している。2 年次で歯科専門体験実習が導入されているものの、歯科材料がどのように使用されるかがわからない状況で履修することは学生の興味の欠如に繋がることから、毎回の講義ではその導入にかなりの時間を割いている。また、履修後の学生や卒業生からは、「理工って難しい」「材料の成分を覚えるのが大変」「保存、補綴を履修して重要性がわかった」「基礎なのに国試にたくさん出題される」等の意見を聞くことも多い。これらに対応する方略として、演習型講義の充実、関連材料の結び付け、国試

過去問提示による低学年からの意識付け、関連教科との連携など対応策は様々であり、日々試行錯誤して対応してきたが「何が正しいか？」を見つけることは容易ではない。何れにせよ、歯科医師養成機関に属する我々教員は、一丸となり継続的な改善に取り組むことが大切であり、学生に対して否定的ではなく常に前向きに指導することで、知識を兼ね備えた人間性豊かな歯科医師を輩出できるものと確信している。

今回の特別講演では、歯科材料の変遷から今後の歯科理工学教育の在り方を、これまでの実例をご紹介します。講演させていただきました。

優秀論文賞受賞講演

1. 岩手医科大学附属病院の医科歯科連携における口腔ケア外来の役割と課題

Role and challenges of Oral Health Care Clinic in cooperation between medical and dental departments in Iwate Medical University Hospital

○赤松 順子, 岸 光男*, 阿部 晶子*,
熊谷 佑子, 高橋 直子, 青木 玲子,
千葉 舞美, 杉山 芳樹

岩手医科大学歯科医療センター歯科衛生部, 岩手医科大学歯学部口腔医学講座予防歯科学分野*

周術期の口腔衛生及び口腔機能の維持・向上が、合併症抑制などよい影響を与えることが認められてきた。平成 24 年の歯科診療報酬改定で、急性期病院における医療提供を効率的に行うため、周術期における口腔機能の管理等、チーム医療の推進が重点課題とされ、がん患者などの周術期における口腔機能管理計画策定料および管理料が新設された。これに対応し、岩手医